第３回「出前教学講座」に出講

安井幹夫

３月２日夕、沖縄教区での第３回目にあたる出前教学講座に出講した。テーマは「おふでさき」であった。主催者側から、「おふでさき」を読むにあたって、お歌とお歌の区切りがよく分からない、という素朴な疑問が寄せられた。とくに拝読における区切りに意見が出された。つまり、意味を考えると、あの区切りではどうなのか、ということであった。

一般的に拝読の区切りは、教会などにおいて、朝夕のおつとめ後に読まれることを主に勘案して、20首前後を基本として区切られている。おそらく意味だけを求め考えていくと、なぜここで区切るのか、という問題は当然でてくる。

したがって、その区切りのあり方は多様性を帯びたものではあるが、そこに日々の拝読を通して、おやさまの親心を感じ、そのおことばを活かしていく読み方としては、妥当であろうとお答えした。なお、研究という上から参考になるのであれば、という思いで、私自身の「おふでさき区分表」を後日、送らせていただいた。

講義は、レジュメをお配りしたが、その一部で終わってしまった。「おふでさき」の執筆について、なぜ書かれたか。とくに史実をみていくと『稿本天理教教祖伝』にも記されていない事柄に言及されているのは、なぜか。また、その内容の特徴などについてで終了。時間的な関係で十分な講義ができず、反省と若干問題を残した。

第280回研究報告会「アフリカ・ヨーロッパ関係論の試み」

森　洋明

昨今、アフリカ（特にサハラ以南のアフリカ）から伝わる情報は、テロや誘拐事件、感染症など概して暗いニュースが多い。それを反映してか、アフリカに対するイメージも「大自然」や「動物」「砂漠」といったステレオタイプ以外に、「内戦」や「民族紛争」「貧困」「危険」など否定的なものも少なくない。確かに、ソマリアやスーダン、中央アフリカ、コンゴ（民衆共和国）など、現在も不安定な社会情勢を抱える国が多いのも事実である。

アフリカで起こるさまざまな出来事を考えていくとき、それらを現在だけの視点で捉えていると、単なる「民族紛争」や「宗教対立」「貧富の格差」から来る問題であるという指摘になってしまう。しかし、この紛争や対立、格差には、数世紀にわたるヨーロッパとの関係が深く関与している。それは、15世紀の大航海時代におけるヨーロッパのアフリカ「発見」から始まり、それに続く約３世紀にわたる奴隷貿易時代、さらに続く西欧列強国のアフリカ分割、そこから本格化するヨーロッパの植民地統治、また植民地独立から冷戦時代を経て、一党独裁制から民主化へ移る過程である。したがって、アフリカの「今」を考えるとき、アフリカには切り離すことができないヨーロッパとの歴史的な関係があることを看過することはできない。またそれは、現在のアフリカの生活文化や言語、宗教、あるいは政治や司法、教育制度などにも反映されている。

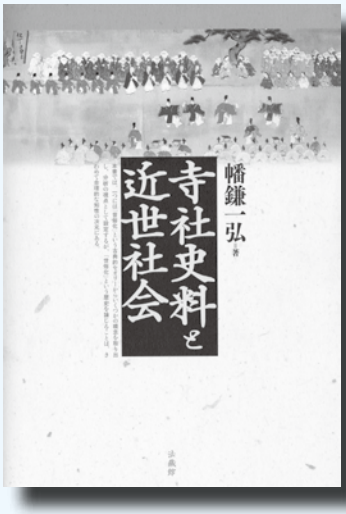
今回の発表では、両地域を合わせると約100カ国になる壮大な関係の「大見出し」を提示しただけであるが、コンゴとフランスの関係を中心に今後少しずつ掘り下げていき、アフリカとヨーロッパが相互に依存してきた諸相を明らかにしていきたい。

自著紹介

『寺社史料と近世社会』

幡鎌一弘

本書は、筆者（幡鎌）が20年にわたって検討を加えてきた中世後期から近世における南都の寺社（興福寺・春日社など）の動向を明らかにしたものである。宗教社会学あるいは歴史学にとってもっとも基本的な事項に属する世俗化論と史料論を、それぞれ第一部・第二部の柱にしている。第一部では寺院組織の変化を「分化」としてとらえ、世俗の事務を担う機構が生み出されてくることや、担い手の専業化を取り上げている。第二部では、史料作成担当者の身分的、特権的な性格を明らかにし、目録や写本を作成して史料を保存したこと、史料を利用することを通して新たな由緒を語り出し、あわせて寺社の歴史が地域の歴史と同化していくことなどを論じている。ここでの由緒論への関心は、本所の宗教研究会の成果である『語られた教祖』（法蔵館、2012年）での教祖伝・開祖伝研究の脱構築に直結している。



本書で扱う組織の分化や官僚化・専業化・教義化などは、どの教団においても分析が可能である。正直なことを白状すれば、このような問題関心は、みずからの立ち位置に由来するきわめて経験的なもので、実は、まったく別のところに土俵を置き換えて議論しているにすぎないのである（法蔵館、2014年12月刊、8,000円＋税）。